《巻頭言》

第18回日本禁煙学会学術総会を終えて ～受動喫煙のない日本へ～

第18回日本禁煙学会学術総会 会長
西伯病院 院長、鳥取大学 名誉教授、日本禁煙学会 特任理事
長谷川純一

米子（よなご）で会いましょう

対面での現地開催の良さを再確認

第18回日本禁煙学会学術総会米子大会を2024年11月16日、17日両日に鳥取県の米子コンベンションセンターにて開催しました（図1）。実に5年振りの対面での現地開催で、たくさんの方々と再会することができました。

Webあるいはハイブリッド開催と比較した場合、旅行が必要であることや、通常業務を休む必要があるなど、参加しやすさや、時間的制約面で劣るものの、限られた期間に意識が集中できる点、多くの参加者との討論が容易であること、制約無く情報交換が出来ることなどの利点が考えられます。

今回は、結果的に禁煙推進学術ネットワーク会議と初日がバッティングしたことや、隣県の出雲大社神在祭も重なり、予想外にホテルが逼迫したことなどのハンディキャップがありましたが、409名の参加をいただき、各会場で白熱した討論があり、ポスター会場にも多くの会員に出席いただく結果となりました。

前理事長講演、会長講演と教育講演

力のこもった前理事長講演から始まった学術総会でしたが、特に現在全国で禁煙外来の活動が低下している主因であるチャンピックス（バレニクリン）の出荷停止に関して、その詳細と現在製造方法の一部変更についてメーカーが申請中であり、来春にも出荷再開見込みであるというご発言に皆が安堵しました。

会長講演の「受動喫煙のない日本へ」には、受動喫煙に関する定番知識の他、最新の情報も加えました。講演の最後には大会宣言（表1）を提示し、満場一致で採択いただきました。この様子は翌日の新聞

図1　学術総会ホームページ
https://www.kwcs.jp/jstc2024/

表1　受動喫煙のない日本へ（大会宣言）

私たちは受動喫煙の根絶を目指し、以下の点に注力することを宣言します。

1. 私たちは、加熱式タバコを含む喫煙・受動喫煙の有害性の科学的検証と、一般市民への啓発に努めること
2. ニコチン依存症患者の依存からの脱却を支援すること
3. 職場や交通機関、飲食店のみならず、あらゆる空間において、全ての人に受動喫煙が生じないように、法令の整備と遵守を求めること
4. 私的空間の喫煙であっても、他者に受動喫煙させることのないよう、住宅での受動喫煙対策について、法令の整備や行政が介入できる仕組み作りを促すこと

やWebニュースにも取り上げられました。この点も現地開催ならではのマスコミ取材の結果でした。

教育講演では、「新型タバコによる健康被害～ハームリダクションという幻想～」と「受動喫煙―サードハンドスモーキング，加熱式タバコ」の2題を午前と午後に講演いただきましたが、それぞれ禁煙教育委員会、受動喫煙対策委員会を代表して講演して下さいました。

海外招請講演

海外招請講演Ⅰでは、Tobacco Control in the U.S.: FDA's Current Approach to Regulating Tobacco, including Heated Tobacco Products. と題して、加熱タバコを含めた米国の現状をFDAの担当者（Martha C. Engstrom）から解説いただくこととしていました。しかし諸事情で会期後のオンデマンド配信となってしまい残念でした。ただ、スライドには日本語表記もあり、分かり易かったことはせめてもの救いでした。

会場では、海外招請講演Ⅱとして「東南アジアのタバコ事情～マレーシア・シンガポールを中心に～」をマレーシア出身ながらシンガポール国籍もあるLee JiaXian氏に流暢な日本語で講演いただきました。

繁田正子賞

恒例の繁田正子賞セッションでは5題の演題が発表されました。最優秀賞は「「理解すること」から「信じること」へ―喫煙防止・禁煙支援トークで何が変わる？―」を発表した長岡赤十字病院の野川真澄先生が受賞されました。優秀賞（第二席）は河村汐織先生と、優秀賞（第三席）中田穂乃花先生の受賞でした。

シンポジウム

公募指定演題を含むシンポジウム1では「家庭と職場での受動喫煙」がテーマで、アンケートに基づき、職場ではまだ受動喫煙が残されていることや、集合住宅における受動喫煙対策の必要性などが、法的な面も併せて議論されました（図2）。この様子は地元新聞のみならず、全国紙にもカラー写真入りで紹介されました。このテーマは一般にも関心がありそうで、東京新聞ではニュース以外の「健康」欄に後日掲載されました。

特別企画シンポジウムでは「防煙教育の実際」として、長年児童や生徒に対する防煙教育を担ってきた医師らから、力を入れた点や工夫などが披露されました（図3）。

シンポジウム2では「喫煙妊婦と心理・社会的背景と禁煙支援」について、妊娠中の喫煙の問題は誰もが認識しているように思えるものの、禁煙できない妊婦がいる現状とその背景や、禁煙支援を通じての諸問題へのアプローチなどが検討されました。

シンポジウム3では「タバコと栄養」として管理栄養士の取り組み、学校教育、さらには睡眠障害との関連など多岐にわたる問題が提示されました。

喫煙と同様に依存を底流とした諸問題をからめたシンポジウム4のテーマは「依存症全体から見たニコチン依存症」で、アルコール依存、ギャンブル依存やネット、ゲーム依存等、脳内報酬系を介した共通点や様々な取り組みに関し情報提供がなされました。

図2　シンポジウム1
「家族と職場での受動喫煙」

図3　特別企画シンポジウム
「防煙教育の実際」

一般口演とポスター発表

一般口演はⅠ～Ⅶのセッションで、計37題のご発表をいただきました。中には発表者や座長と他のシンポジウムでのシンポジストなど、掛け持ちをしていただいた会員もあり、対面開催ならではのご苦労をおかけしましたが、なんとかやりくりすることができました。一方、座長をおいたポスター発表にも、多くの会員が詰めかけ、質疑応答に花が咲いていました（図4）。

図4　ポスター発表風景

特別企画と懇親会

初日の締めくくりは特別企画「受動喫煙ゼロへの道：イエローグリーンキャンペーン（YGC）の挑戦」と題するもので、川合厚子、齊藤道也、橋本洋一郎の先生方から全国におけるイエローグリーンライトアップの意義やその広がりについての解説をいただきました。なお、今回のYGCフォトコンテスト入賞写真は、第1会場～第2会場間の廊下の壁面に会期中展示されていました。

その後会場をホテルに移し、繁田賞の表彰、会員懇親会となりました。当地の代表的地酒（大吟醸酒）をMiss SAKE TOTTORIに解説付きで注いでもらえる特典もあったのですが、アルコール控えの世の流れでしょうか、大吟醸に余りが出たようでした。料理も比較的好評で胸をなで下ろしました。出し物では、軽快なドラム演奏をバックに、MALTAさんのサックスが響き渡り、それをスマホで写真やビデオに収める方が多かったのは印象的でした（図5）。終盤には日本禁煙学会専門医で整形外科医の市場和志医師の華麗なマジックショーで盛り上がりました。私も拝見するのが初めてのマジックが多く、本当に自らの目を疑うばかりでした。

図5　懇親会風景

2日目のプログラム

シンポジウム5は教育講演の2題とも重なることが予想されましたが、今、会員の関心の高い新型タバコ、加熱式タバコを中心に据えた「新型タバコ時代の禁煙推進方策」がテーマで、最新の情報から、救急病院、クリニックの禁煙外来での取り組み、広域の禁煙外来データベース構築による禁煙支援の環境整備等が紹介されました。

また、今回も「地域で活躍する次世代の薬剤師　次世代の薬剤師の育成／地域で活躍している薬剤師（草の根活動）」として、シンポジウム6では地域保健教育や多職種の中心としての薬剤師ならではの話題が討議されました。

歯科委員会からのプログラムは「歯科医院から始める禁煙支援」として、ワークショップを行っていただきました。また、心理部会も前回好評だったと言うことで、「禁煙の心理学的アプローチ」として司会をおいた談話会形式で意見交換が行われました。

スイーツセミナー

毎回話題となる「ナースのための禁煙スイーツセミナー」については、これも5年振りで、現地スイーツに対する期待の大きさに大会長も頭を悩ませました。因幡の白ウサギフィナンシェと、禁煙マーク入りどら焼き、当日の早朝作りたての打吹公園だんごの和洋3品をいただきながら、第1部の講演2題、ワールドカフェ形式ワークショップの第2部と、禁煙支援のノウハウを余すところなく分かち合いました（図6）。

おわりに

何はともあれ、5年振りの対面現地開催の禁煙学会学術総会は意義深いものとなったように思われます。今回も学会の各部会・委員会単位でプログラムを構築いただき、多彩なテーマの催しになったことが魅力を増す原動力になったものであり、本当に感謝いたします。大都会と比べ交通インフラなどが劣るところはありますが、おもてなしに力を入れようとした所はご理解いただけるかと思います。近年の経済事情もあり、製薬メーカーなどの援助が厳しく、これまでのようなランチョンセミナーはできませんでしたが、施設の使用料は許容範囲であり、自治体の補助金なども含め、何とか赤字を出さずに済んだように思います。

最後に、ご協力いただきました各部会の会長さん始めシンポジストとしてご登壇いただきました方々、座長の労をお取りいただいた方々はもとより、ご参加いただきました会員の皆様に心からお礼を申し上げます。

図6　スイーツセミナー成果